



アジア選手権大会の前半が終わった休息日、新緑の大高緑地でのトレイルO大会は韓国から7名、香港からの2名を含む総勢123名が参加し、「AsOC協賛」にふさわしい国際大会となった。硬軟とりまぜたバラエティある大会であったが、以下に話題を提供すると考えられる低正解率コントロールについてコメントを試みる。

■#1 日陰で見づらい植生界



#1 (A-D 半ば開けた土地、北西の部分)

60m余り先のやぶと接したラフ・オープンな緩やかな植生界のコーナー(約120°)を確認させる課題だが、円の中心(植生界の角)は向こう側への下降傾斜の始まり部分にある上、手前に低いブッシュもあり視界が制限される。加えてわえて逆太陽光線ではコーナー周辺が日陰となって植生界が確認しずらく、正解である「Z」判断はなかなか難しい。午前中スタートと午後スタートでハンデキャップが生じると思われるコントロール。(正解率30%)
なお、位置説明は「植生界の角、内側」の方が良いだろう。

■#3 雑木越し地形確認に難

#3 (A-D 半ば開けた土地、北西の部分)

DPに到達するには道から外れて草地を横断しなければならない。さらにコントロール周辺の地形確認にはその草地を前後移動しなければならない、車いす競技者にはいささか不親切。雑木越しに見下ろす地形もテラスらしくなく、その形状がよく確認できなかった。正解表の解説どおりにはゆかないコントロールであった。(正解率45%)

■DP からフラッグが見えない



#5 (A-E 北東の土がけ、根元)

このコントロールは正解率が27%と下から2番目に低い。本来は回答に時間のかからないやさしいコントロールであったはずなのだが、問題点はDPから全フラッグが確認できないことである。少しずつ戻り移動を繰り返すとチラチラ見えてくるフラッグがあり、それである程度補正せざるを得ない。

見えないフラッグをしつこく探すことで、かえってこのコントロール周辺地形が確認できてしまい「Z」とわかったのは皮肉。ともかくDPからフラッグが確認できないのは基本に反する。

■隣接ではなく密接フラッグだ



#6 (A-D 尾根)

筆者にとって今回のコース中で、最も異論のあるコントロール。数年前までのスウェーデンの0-Ringenを思わせるようなマニアックなコントロールだ。

現地は目の前にある小面積の丘状のところの幅4mほどの部分に1m間隔で四角形にフラッグが4本密接して方形にセットされている。

1/4000の1mは地図上では0,25mmである。一辺が0,25mmの方形を地図上にプロットすることは不可能である…

ということは、コントロール・サークルのセンターが判別できないということである。ともかく円の中心点がピン・ポイントできないのだ。このような近接コントロールでの判断を求めるのは、もはやトレイルOではないと筆者は確信する。解説ではいろいろ教えてくれているがトレイルOはパズル解きでは無いはずだ。この傾向がエスカレートしてゆけば日本のトレイルOはどうなってしまうのだろうか…と、行く方が案じられるような思いを抱いたのは筆者だけの思いすぎだろうか。

正解率が42%とまあまあなのは、このようなコントロールを求める=好む競技者も居るといふことのあらわれか? ちなみに位置説明は「尾根」よりは、「こぶ(丘)、南西の部分」の方が適切であろう。

■より確実な方法が裏目に



#8 (A-E 岩がけ、南東の部分)

コントロールの北西にある独立樹からの単純なコンパス・ベアリングで求めると正解の「B」を示す。しかしコントロール円のふちが引っかかっている南東の舗装道路の角(がけの上)と独立樹を結ぶ線が円の中心を通ることに気付くとDに導かれる。単純な1点からの方位測定よりは、より確実であるべき2点を結ぶ方法を用いると誤解答となる不思議なコントロール。

岩がけの形状も違っているようだ。(正解率34%)

■地図読みの難しさ、楽しさ

#12は、岩石地を見下ろし、地図上の「岩」が現地のどれかを見極める課題。DP付近では横方向のみせいぜい20mほどの移動しか許されないのが岩石群の中から、地図に描かれている岩を選び出すのに結構時間がかかる。面白いコントロールであるが、正解率は28%と非常に低い。

ここから#13, 14, 15と低正解率のコントロールが続く。

#12 (A-E 岩石地、北東の部分)



#13 (A-E 沢、北の部分)

#13 は、近くまで行けるものの なかなか形状がつかみにくい複雑な沢。
(正解率 38%)

■地図上で何 mm まで読みとれるだろうか？視力テスト？



#14 (A-E 小道、南東のふち)

湿地の中の木道のふちに取り付けたフラッグの中から正解を選ぶもの。

これもフラッグ間隔が厳しくて、地図上で円のセンターを出しにくいコントロールである。湿地の青い横縞も邪魔をする。センターが出せなければお話しにならない。ここのフラッグ間隔も1mか？ 正解率は31%と低い。

また、立つことの出来る健常者は、#13→D Pまでの移動の間、ずーっとフラッグ群を眺めながら移動できるが、車いす競技者は植込みが邪魔してそれが出来ない。いささか不公平な感じがする。

■ルール違反を誘発する？

#15 (A-E こぶ(丘)、北東の部分)

(前ブロックの地図を参照)

100mあまりを隔てた池の反対側のコントロールを眺めるものであるが、南西の茂みが日陰を作り、確認しづらい。少しでもコントロールに近づいて確認しようとして南一南東の立入禁止の小道に入る複数の違反者が出てしまったコントロール。ルール違反者をどうすれば防ぐことが出来るか？それは運営者の課題であろう。あわせて違反者への公平な対応が求められる。

解説では「北東側の東屋付近から見ると・・・」とあるが、地図では東屋周辺までパープル・ハッチがかかっており、誰もそこまでは行こうとしないだろう。

正解率は19%と全コントロール中の最低を示す。この数値は意味深い。なぜこのように低くなったのかを関係者はぜひ分析して次につなげてほしい。



↑湿地をへだたてて、左手に#15を見る

コントロール#19 (A-E 小道と小道の分岐)の正解率が33%と低いのはちょっと理解しがたい。道路の分岐周辺まで移動して上下の階段を結べば、分岐上にあると見えたフラッグが、いやでもラインからはみ出してくるので「Z」判断は容易。

■ TOPは木村、順調にWTOCをめざす……

成績は今年のWTOC 3位以来の好調を持続している木村治雄が2pのミスのみでトップに入った。この好調子を8月のノルウェーでのWTOC (トレイルO世界選手権大会)へつなげてほしいものである。



左から ②荒井、①木村、②杉本 (撮影:児玉)

★成績

- ① 木村 治雄 19p 33sec
- ② 荒井 正敏 17p 31sec
- ③ 杉本 光正 17p 81sec
- *****
- ④ 茅野 耕治 17p 84sec
- ⑤ 中尾 吉男 16p 103sec
- ⑥ 鈴木 規弘 15p 22sec
- ⑦ 大久保裕介 15p 83sec
- ⑧ 三森創一朗 15p 86sec
- ⑨ 佐藤 清一 15p 99sec
- ⑩ 楠見 耕介 15p 108sec

以上⑩位までは22年度日本トレイルO選手権大会の出場権が与えられる。

筆者の心中では、日本のトレイルOの将来にまで思いを馳せた印象に残る大会であったが、これだけの大会を提供してくれた運営者側の労苦に感謝するところ大である。

なお、本大会のコース・セッターは大坂大会に続く気鋭の伴 毅、コントロールは児玉 拓、競技責任者は山口拓也。
(こやま たろう)

トレイルO世界選手権大会 (WTOC 2010)
派遣日本代表選手きまる

- | | |
|-----------|-------|
| 監督兼選手 | 田中 徹 |
| 選手 | 鈴木 規弘 |
| 選手 | 木村 治雄 |
| 第一補欠 | 田代 雅之 |
| 第二補欠 | 藤生 考志 |
| Pクラス選手 | 木島 英登 |
| Pクラス選手 | 森 長三 |
| チームマネージャー | 山口拓也 |
| オフィシャル | 小山太郎 |

今年のWTOCはフットOのWOCと同じノルウェーのトロンハイムで開催される。

今年の目標はPクラスでの木島の6位以内入賞と、昨年3位でブロンズ・メダルの木村が異なる色のメダルを手にするか？・・・に期待がかかる。日本は、いまや、トレイルOの世界で各国から大きくマークされている存在だ。

読者諸氏の熱きご声援をお願いしたい。
